

青かび根腐れ病 (*penicillium sp*)



生育ムラが発生



根が褐変、細根が脱落

【被害と診断】

本病は *Penicillium* 属菌による土壌病害で、1996年福島県で初確認され、現在は全国的に発生している。本県では2001年に県南で初確認された。病徴として生育不良の症状が現れ、十分な切り花長が確保されなかったり、草丈にムラが生じる。さらに症状が進むと萎ちょう、枯死する。このような株の根は褐変し、細根が脱落してなくなる。また、地際の褐変部には青緑色のかびが着生している場合が多い。連作により被害が拡大する傾向がある。

【発生生態】

発生生態については不明な点が多いが、発病に以下の特徴が挙げられる。

- ・ 本病の発生には品種間差異が認められる。
- ・ 土壌の違いにより被害程度が異なる（灰色低地土壌は火山灰土壌に比べ発生しにくい）。
- ・ 土壌投入資材が本病の発生に影響を及ぼす（完熟堆肥は発生を抑制し、モミガラは発生を助長する）。
- ・ 過剰施肥で発生は多くなる。